

## 補遺 I 唱歌歌詞選

ここに収録した歌詞は、明治時代のプログラムに登場した唱歌の中で、原作曲者と原曲が判明している唱歌歌詞である。当時、唱歌は、ヨーロッパやアメリカの歌曲に原詞とはほとんど関係のない徳育智育花鳥風月を詠じた歌詞を付け、日本の歌として歌われていた。

歌詞は題の五十音順に配列し、各歌詞の終りに原作曲者名および原曲名を記した。東京音楽学校が出版した唱歌集の歌詞は除外した。(『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第一巻』巻末楽譜資料を参照)

### 歌詞の出典

『唱歌詞集』二冊〔東京音楽学校明治二十年代の詞集〕

『東京音楽学校演奏會歌詞』明治三十二年十二月以降

『歌詞製作簿』明治三十六年四月

〔三点とも手書き〕

あゝ、いづちゆく

乙骨三郎作詞

あゝ、いづちゆく、我が友よ

あゝ、いづちゆく、我が友よ

あゝ、いづちゆく

五百重の雲の、隔たる彼方

我はたどる、都路へ 學校へ

あゝ、とくかへれ、我が友よ

あゝ、とくかへれ、我が友よ

あゝ、とくかへれ

青葉の風の、涼しき頃ぞ

またも逢ひ見ん、古里に―森陰に

原作曲者 Beethoven 曲〈Der treue Johnie〉

### 秋の夜

佐藤誠實作詞

夜ぞ秋の夜 吹く風淋しく

萩の葉そよげり

萩のはく 夜もすがら なるよ

心の静けさ 秋の夜やあはれ

夜ぞ秋の夜 村雨淋しく 燈火くらしな

こおろぎく 夜もすがら

なくや ふしどの しづけさ

秋の夜や あはれ

よるぞ秋の夜 照る月さやけく 白露みがけり

かりがねく 面白の聲や はしみのきやうなる

秋の夜やあはれ

原作曲者 Chvatal 曲〈Night, O Sacred Night〉

### 天津日嗣

大和田建樹作詞

一 あまつ日つぎのみさかえは。

あめつちの共。きはみなし。

わがひのものと。みひかりは。

月日とともに。かゞやかん。

二 葦原の。ちいほあき、瑞穂の

くには。日の御子の。

きみとますべき。ところぞと。

神のみより。さだまれり。

原作曲者 Reichardt 曲〈Das Vaterland〉

### 雨の巖戸

旗野十一郎作詞

あめの。安の。河原に。

萬神達。いより、集ひ。愕然。巖戸、とちてか。

世は。常闇。いかにや。く

こはや。くいかにや。

たれか。くはかる。

阿知女。手草は。日蔭。眞拆。小竹の葉。

あちめ。おけ。おけ。(唱)

まへや、うたへや。  
舞まへや、歌うたへや。  
まへや、まへや、歌、うたへや。空槽は。とゞろ。か  
みたち。どよもす。  
ア、うけば。く。  
とゞろ。いはと、ひらけて。  
ア、みよは。く。  
あけぬ。ア、あけぬ。ア、あけぬ。

原作曲者 Haydn 曲「The Seasons」より「God of Light」

### 天浮橋

鳥居忱作詞

第一章  
立籠る、天の狭霧。其中に、陰陽の神。  
天の浮橋に、見ろなはす、底下。  
浮べるは、あぶらか。

第二章  
搔探る、天の瓊矛。其の雫、島となる。  
磯敷盧島にぞ、八尋殿。作給ふ。  
嗚呼、佳しや。此の島。

原作曲者 Cascioli 曲「Veni creator spiritus」

### 秋の夕暮

武島又次郎作詞

「歌詞は明治四十年十二月十四日、十五日の「音楽演奏  
曲目梗概」を参照」

原曲 スコットランド民謡「Abschied」

### 祝歌

乙骨三郎作詞

「歌詞は明治四十一年十二月二十九日の「音楽演奏曲目  
梗概」を参照」

原作曲者 Wagner 曲「Tannhäuser」より行進曲

### 浦島子

鳥居忱作詞

水の江の朝和、小舟浮けて、綸を垂る。  
釣得たり、釣得たり、怪の大龜。  
目瞳むか、舟の上。衣香薫じ、珮聲鳴る。  
不思議やな。不思議やな。乙女と化したり。  
率や、いざいざ、吾背、蓬萊の仙宮。率や、率々、  
たまへや、蓬萊の仙宮。  
瑠璃、玻瓈、碑碣、礪磧、光るや、高樓。  
珊瑚は階。庭には金銀。  
遅しよ月の影。不老の仙宮。翠帳紅闌。夜はの夢、  
あはれはかな。

原作曲者 Schumann 曲「Wassermann」

### 宇佐神託

鳥居忱作詞

廣前の燈火、差す影更けて。  
大神の顯形、正しくうつし。  
我が國の日嗣、皇太神の皇緒と、畏き神託。  
原作曲者 J.S. Bach 曲 Choral「ローレルのタイ  
トルは不明」

### 大塔宮

黒川眞頼作詞

おもへはむかし。いまはむかし。  
おもへはもへは。きみかなし。  
けんむのむかし。いまもいまも  
けんむの、みだれ。きみは、かなし  
いさをはたかし、つきのひかり  
おほへばくらしくものへだて  
かまくら、やまの。つちのひとや  
そよともかせの。おともなしや  
ひかけも、さゝぬ。こけにそてに  
ひらめきかゝる。あきのしもや  
はかなくきえて。すきしむかし  
おもへはもへは。いとむかしこ  
原作曲者 Slicher 曲「Der alte Barbarossa」

### 鴨綠江

鳥居忱作詞

山可襟帯、鴨綠江。要害堅固、九連城。  
天佑享る皇軍は、正々堂々押し渡る。  
旗影望みて、敵軍潰ゆ。  
今差昇る朝日の御影、  
今差掲る朝日の御旗、  
綾威の光、眞空の光。  
光交して、世界の中照さむ。  
大元帥陛下、萬歳、萬々歳。  
大元帥陛下、萬歳、萬々歳。  
九連城頭、天地震ひ、  
鴨綠江畔、山河撼く。

大日本帝國、萬歲、萬々歲。

原作曲者 Handel 曲「Judas Maccabaeus」より  
〈Siegeschor〉

海上朝歌

鳥居忱作詞

〔歌詞は明治四十一年六月六日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原作曲者 Kiel 曲〈Fern im Osten〉

## 樂 頌

安藤勝一郎作詞

合唱  
藝術は永く、生命短き、人の世に、樂は力。アイ  
オニアの箏篋の音泣えて、魂を返し、猛將をひし  
ぐ、尊とや、其伶人。

第二高音部獨唱

ペルセポリスの覇者の饗宴、みまつに召されぬ、  
譽の樂聖。

月桂樹さすや、つはもの星か、薔薇かざす、テイ  
スは花歟。

第一高音部獨唱

家路遙か、來つ見つ勝ちし、王者の花の饗宴。

合唱

藝術はながく生命短き、人の世に樂は力、力なれ  
や。

第二高音部獨唱

血に餓ゆ、をこのものや、走る屍、うごく肉

第一高音部獨唱

名に酔ふうつゝのものを、無辜を殺し、家を焼き、  
財を掠め、骨肉屠る。

第一第二高音部合唱

其夢いでや醒さんと、

次中音部獨唱

高く低く、奏つる調、天翔り、冥府に入る。

人や我、われや樂聖、まぼろしか、將たうつ、歟、  
幻か現か。

合唱

落ちて落ちて、高玉座より、いとも尊き帝座より、  
まろびて墜ちて、紅の血潮にまみれ、五體裂かれ、  
皮肉は破れ、見よ、臨終のまなこふさがん家臣等  
に、棄てられ、大地の上に、死するは誰ぞ。

波斯の王の、浅まし果ぞや、果ぞ、果ぞや。

第一中音部獨唱

猛き王も、これをみては、胸やさわぐ、テイス姫  
を、

第一高音部獨唱

斜に見やりつ、歎息つき、嬖姫の膝にぞ、頭うつ  
む。

合唱

聴かずや、さめずや大王。めさめずや、つはもの  
ども。み空より、黒雲湧き、却風吹きて、焰降る  
は。

第一高音部獨唱

紅蓮の、其の眼、かざしなす、其蛇、王のため、  
命棄てにしつはものの、復讐神ぞ。

合唱

聴かずや、さめずや大王。

第一高音部獨唱

聴かずや、つはものども。火花散る、炬火を、虚  
空高く、振りにぞふりて、彼方の虚空を、虚空を、  
指すはたぞ。

合唱

絶ちけり、眠の緒。醒めけり、つはものども。か  
れらこそ、戦場の露と、消えにし戦友、なつか  
しの戦友。

女聲三部合唱

敵の都城、はやはや焼きて、亡き戦友等の、妄執  
をはらせ、なきともらの、妄執をはらせよ

第二中音部獨唱

號びくるひ、手に手に。

第一高音部獨唱

炬火とりて。

女聲三部合唱

敵の都城に、投げに投げて、花の都城、花の首都  
たちまち、灰となりぬ。

合唱

微妙や、テモシウス。あな尊、樂の力。逝けるも  
の、幽界より起ち、樂のねには、  
つはもの、皆うごく、樂の、樂の音には、つはも  
のうごく。

樂こそ、夢の世に、樂こそ、尊とけれ。

藝術はながく、生命短き、人の世に、樂は力、力  
なれ。

(参照)

亞歷山大王波斯を征し其首都ペルセポリスに  
入るの夕、置酒高會して三軍を搞ぶ。樂聖テモ

シウス、波斯王ダライアスが横死の惨状を彈奏す。大王聽きて人世無常の感に堪へず、嬖女テイスの膝に伏す。テモシウスまた、幾多の戦場の露と消えにし希臘兵の亡靈を喚起し、其冥福を禱らむことをうたふ。將士狂憤、亡友の妄執を慰撫せんと欲し、炬火を投じて波斯の首都を焚く。凡て是れ樂聖テモシウスが箴懲の力。

(ドライデン作、亞歷山襲宴又の名「樂の力」)  
原作曲者 Mendelssohn 曲 劇付随音楽「アタリ  
ー [Athaliae]」一八四五年。原作、ラシース。

## 樂 德

旗野十一郎作詞

日靈の神の、怒を解き、  
暴惡な鬼も、心に感で、  
空行く雲の、歩を止め、  
梁の塵さえ、起ると聞く。  
斯くまで妙に、奇異しき物、  
用ゐて國の、教育に副ひ、  
花ともひらき、月とも照つる。  
人の眞誠の、にはひぞ是れ。

原作曲者 J.S.Bach 曲 Choral (If I should e'er  
forsake Thee)

## 惶 御 影

中村秋香作詞

惶 御 影 今 迎  
かしこきみかげを、いまこそむかふれ、

## 嬉 樂 今日 有

うれしきたのしき、けふにもあるかな、  
今 御國 音楽 道

いまよりみくにの、おながくのみちは、  
年 毎月 毎 彌進  
としごとつきごと、いやすゝまん、

## 嬉 樂

あはれ、あなうれし、あな、たのし、

原作曲者 Mozart 曲不明

## 形見の刀 (佐介貞俊妻) 鳥居忱作詞

我が心、知らぬかや。吾か夫、うらめし。  
是なる刀、誰には、見をとて、形見に、ぞめぬ。  
斯くて世には、我が身も、堪へては、あらねに。

原作曲者 Gluck 曲 (Oh! in the Woods so Sad  
and Sombre)

(1) 太平記——第十二卷 (佐介貞俊妻)

## かちどき 武島又次郎作詞

さげし身は鐵石の快男子  
をどりたつ髮空をも衝かむ  
をどりたつ髮空をも衝かむあはれ誓はむ見そなは  
せ神よ

永久に汚さざらむ清きこの名  
永久に汚さざらむ清きこの名

原作曲者 Fülger 曲 (Sei getrost)

## 歸る雁がね 中村秋香作詞

歸ると見つる家ちの夢の行衛とかさむ春の明ぼ  
の。  
雲路はるかに聲もみたれておくれ先だち歸る雁が  
ねく。

なれも花には心うつさで雪のふるすの空ぞわすれ  
ぬ。

ゆきの古巢の空ぞわすれぬ。  
あわれ雁がね。

原作曲者 Mendelssohn 曲 (Abschiedslied der  
Zugvögel)

## 神 言 石倉小三郎作詞

〔歌詞は明治四十四年五月二十七日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原作曲者 Mendelssohn 曲 (Wirf dein Anlie-  
gen)

## 神の御稜威 吉丸一昌作詞

〔歌詞は明治四十四年十二月九日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原作曲者 Schubert 曲 (Die Allmacht)

## 閑庭菊 鳥居忱作詞

柴の編戸、さゝでも、人は訪ひ來ず。  
門の柳、秋はふけて。

窓の下に、白菊は、亂れて、咲きたり。  
今は唐詩も、讀むさへうしや。下立つも佳し、暮  
れぬほどに。

いでやひとり、ながめむ、手栽の菊。  
暮れや残る、夕日の影。  
窓の下に、菊の一叢、白く見えつゝ。

原作曲者 Weinurm 曲「Toscanische Lieder  
Nr. 1」

雁 叫 旗野十一郎作詞

かりの、さけび、霧たつ空の、  
かりの、さけび  
何處を目的の、旅より旅に、  
迷ひやすらむ、あはれなる、其聲よ、  
おもふか父を、かりの、さけび、しのぶか母を、  
かりの、さけび  
燈火暗き假寝の窓に、  
月影さして。さなきだに、淋しきを、  
吾夢やぶる、かりの、さけび、他やもねぶる、  
かりの、さけび。

原曲 Russian Folk Song (from the Wolga)

鞠場の默契 鳥居忱作詞

一、廣庭の木の下、蹴給ふや蹴鞠。  
蹴る卻含御靴は、鞠と脱げ轉ぶ。  
金蘭の契は、皇國の鎮よ。  
二、御靴持つ連は、跪き捧ぐ。

御靴執る皇子は跪きうけぬ。  
刎頸の契は、皇國の護よ。

(参照)

中臣鎌子(藤原鎌足) 見皇子中大兄(舒明皇  
子、即天智天皇)仁慈有局度、欲與俱舉事、  
而朱有由告之、一日皇子遊法興寺、蹴鞠樹  
下、鎌子亦同在焉、會皇子靴脱、與鞠轉展至  
前、因起之靴、跪奉皇子、皇子亦跪受之、由  
是得親近。〔國史略〕

原作曲者 Homilius 曲「Wer nur den lieben  
Gott lässt walten」

菊の盃 武島又次郎作詞

其一

いはへひとびと 千度百千度、  
御代はなが月 けふのよき日。  
菊の盃を あゝとりぐに、  
菊の盃を とりぐに。

其二

いはへひとびと ちたびもうちたび、  
いといかゞやく 國のほまれ。  
菊の盃を あゝとりぐに、  
菊の盃を とりぐに。

原作曲者 Beethoven 曲「Nun bricht aus allen  
zweigen」O Welt, du bist so schön  
〔異なる二曲に同一歌詞を付して〕

旭日照波 中村秋香作詞

亞細亞のひんがし、大和島根、浪間にほのぐ、さ  
し登るや、朝日の影。  
宇宙に遍く輝く光も、さやかに知られて、アゝ尊  
とや、世界を限なく、照らさんみ影も、きらめき  
渡りて、アゝ惶こや。  
まはゆき光は、見るがうちに、海原はなれて、さ  
しのぼるや、天津み空。  
東西南北、いつれの國かは、此大み影を仰がざら  
ん、禽獸草木、いつれの物かは、此大み恵、かう  
ぶらさる。アゝアゝアゝ

原作曲者 Eichberg 曲「To thee O Country」

菌 狩 旗野十一郎作詞

(段首)  
見渡 岡邊 色着 林  
みわたす、をかべ。いろづく、はやし。(聲女)  
何 秋 深  
いづれも。あきふかし。  
菌 狩 爲  
たけがり、せよと。(主唱)  
時雨 晴 路 好  
しぐれは、はれて、みちもよし。  
いざ。いざ。ゆかむ。  
共 誰 彼 誘  
(ともに)。たれ。かれ。さそひて。

(中) 段

碌青菌 黄蕈 紫 混地茸  
あをたけ、きたけ。むらさき、しめじ。  
紅 菌 薄衣茸  
べにたけ。うすごろも。

(女聲)

意 任

ころの、まゝに。(唱復)

未々 誇合

とりぐ、ほこりあひ。

彼 彼處

あれ。あれ。あれに。

何處 其 藪 蔭

(どこに)。それ。その。やふかげ

(句結)

落葉 掀 人 松 茸

おちば、かゝげて、ひとを、まつたけ。

今日 稀物 嬉 哉

(けふの、まれもの。)うれしや。

原作曲者 Jensen 曲〈Veichen unter Gras ver-  
steckt〉

君 ハ 神

里見義作詞

第一章

君は神 現人神 天地しろしめす。

大君が御稜威、仰ぎ尊め、みなひと。

月日も君が光となる。實にげにいとかしこや

海の如く陸の如く千代ませ我が君、八千代もいま  
せ。

第二章

八咫し、我が君こそ、天照る神の末。  
御璽の八咫の鏡をおかめ、もろびと。

劍の光かゞやくたま。實にげにいとかしこや。  
みてるつき、照る日の影、いやましかゞやけ、か  
はらすかゞやけ。

原作曲者 Beethoven 曲〈Die Ehre Gottes aus  
der Nature〉

金 鵒

鳥居忱作詞

空搔暮れ、氷雨降るや、忽然、金色の、靈鵒、  
皇司の弭に、翺り、舞ひつ、止れり。

其光、輝渡り。其光、輝渡り。宛然、流電。  
宛然、流電。嗚呼、其光、流電。宛然、流電。

醜虜等は、迷ひ眩えて、醜虜撃つ、皇軍は、勝に  
捷たり。

畏しや、稜威の瑞相。其光、稜威の瑞相。  
尊しや、其光、畏しや、尊や。

原作曲者 Mendelssohn 曲「The Elias」より  
〈And then shall your light〉

月前郭公

旗野十一郎作詞

菖蒲さきて、軒端薫る、頃とて、

何にか、誰もたれも、窓々小夜に、戸さゝぬ、

深山わけて、來し身の然ても、

あはれよ、ほとゝぎす。  
心こめて、鳴かずや、

五月雨晴れたる。雲間を仰ぎ、  
かしこくも、かしこくも、影さす、  
月の、御前にせめて、初音は。

原作曲者 Schumann 曲〈Wenn ich ein Vöglein  
wäre〉

子を思ふ母

黒川眞頼作詞

思ふ我が子 思ふ故に 遠き國に遣りしよ

思ふ故に遣りし我が子 は心思へや

思ふ故に遣りし我が子 勤の學べ我が子よ

思ふ故に遣りし我が子 は心思へや

原作曲者 Franz 曲〈The Mourner〉

此 御 山

旗野十一郎作詞

天地。ひらけし。わが世の。はしめゆ。

たかくも。たふとき。富士の。神山。

動かぬ。すがたは。御國の。しるし。

白雪。青雲。しき棚引き。

あはれ。このみやま。このみやま

原作曲者 Mozart 曲〈Ave Verum Corpus〉

さ つ き

大和田建樹作詞

たちばな、かをりて、月に啼く、ほとゝぎす。さ  
つきは、來にけり。山にも野邊にも、晴間を、待  
ちえて、いざ植えよ、さをと女、白露の、玉苗  
を。

よもに満ちわたる、小山田の水のいろ。世はただゆたかに。ちばな、かをりて、月に啼く、ほととぎす。さつきは、来にけり。山にも、野邊にも、晴間を、待ちえて、いざ植えよ、さをと女、白露の玉苗を。

原作曲者 Mendelssohn 曲〈Maided〉

### 薩摩渇

鳥居忱作詞

天晴天晴正義の士 天晴なりや世の鑑  
安政戊午の歳とかや 霜降る月の十五日  
今や天下の正義の士 尊王攘夷を唱へたり  
幕府威勢猶強し 縛め盡す正義の士  
避けよ避けよ正義の士 避けよよく正義の士  
小舟艤ひ英雄が 船出せりな薩摩渇  
眞空の月海原に通ひて 澄む望の夜や  
風は疾し薩摩渇 船は軽し薩摩渇  
聲もあやに詩を吟じて 心おかず酒を酌み  
語らまじや世の事 唯今宵月を見む  
月は高し薩摩渇 浪は白し薩摩渇  
清ら清ら月の夜や 清き心誰か知る  
空に月は晴れながら 胸に曇る思ひかな  
あはれ悲し英雄が避くる所世にもなく  
君の御爲め身を捨て、沈みけりな薩摩渇  
天晴天晴世の鑑 天晴なりや正義の士世の鑑

原作曲者 Schumann 曲〈Zigeunerleben〉(「流浪の民」)

### 里祭

旗野十一郎作詞

秋獲よし 日和よし ことの祭のけさ  
赤飯に にごり酒 家毎に祝ひて  
賜々しき 世のさまや  
稲梁を隔つ 鎮守の杜もれくる 太鼓の音  
さと神樂はじまると いそぎゆく 兒輩等  
孫の手ひく 老婆まで

原曲 Russian Folk Song 〈At the Gate〉

### 山中幽閑

黒川眞頼作詞

谷の戸ほろ、雲の垣根。鎖て、隔て、  
らきよの塵もなしや。  
あな、きよらの己が居處や。己が心、  
令遊居處。

原作曲者 Boenike 曲〈Waldstille〉

### 賤の苧環

佐藤誠實作詞

倭文の、苧環。むかしの。かへすがへす。ゆかし  
や。  
嶺のゆき。ふみわけし。おもかけや。  
あはれ。彼の跡ゆかし。  
身は賤やしつよ。こころは、ゆきぞ。ゆかしき、  
雪ぞ。  
しづの、おだまき。昔の。かへすがへす。ゆかし  
や。  
かへすがへす。ゆかしや。

原作曲者 Mendelssohn 曲不明

### 霜の旦

旗野十一郎作詞

第一章  
鐘の音さぶく 窓の破戸たゞき あくる空  
しろじろと 見し夢もわすれ 起き心地  
爽けきは 初霜の旦

### 第二章

曉の簷に 雀早く語り 散敷ける  
もみち葉に 冬の様見せて 荒庭も  
清らけき 初霜の旦

「この歌詞にはロシア民謡とボヘミア民謡の二種類の旋律が当てられている。」

### 秋風吟

武島又次郎作詞

ふきたつかぜ 旅愁を添ふ、あゝうたてや  
かなしむ我妹 老いたる母 あゝいかじ  
さはいへ 天涯千里 あゝまたそのすがた  
つか みなむ  
もえわたる わかむねふけ 秋風  
燈火くらく ゆめさへ さわぐ  
あゝまた そのすがた いつか 見なむ  
原作曲者 Michael Haydn 曲〈Tenebrae factae sunt〉



述 懷

武島又次郎作詞

輕風森を渡りて、春雨暖く灌げば。  
山の花も咲きでね、野邊の草も開きぬ。  
街のほとり、花籠、いとさよく荷なひありく、売  
花の翁  
高き殿に、低き伏屋に、春を分けて行くなる、花  
賣る翁  
あはれ、賤しと、譏る勿れ、笑ふ勿れ、世の人よ。  
よしや、高き門、今建てれど、  
よしや、億萬の富、ありとも、  
あゝ、待見よ、暫時、暫時、時の間に、朽ち亡び  
ん。  
あはれ、水上の沫、はかなき例ならで、花賣る翁  
が籠のうち。  
常かはらず、命長く、匂ふ花よ、あゝ、いかで、  
しかむや。  
夜あけて、里に立ち出で、日暮れて、又かへる。  
蜂蝶飛びて随ひ、童部あひ睦る。  
あ、あ、あ、あ、花にともなひ、命終る、翁が身  
の上、樂しや。

原作曲者 Brahms 曲〈Song from Ossian's Fin-  
gal〉

曙 光

武島又次郎作詞

鬼魅魍魎を 西へはらひ、萬國てらす 曙光は尊  
煩悶懷疑の 妖霧霽らす、心の曙光よ いとど  
尊

原作曲者 Lassus 曲〈Hymne〉

春 夜 曲

佐藤誠實作詞

木の葉散りて、枝あらは、おほ空冴えて、ものが  
なし、春の夜ゆかし、春に早なれく。  
花や鳥や、色も香も、あまりなりな、春の日は、  
勝る物なき、臘月夜や。  
月の影や、花の陰、時のまも、千々の黄金、あな  
面白や、胸のおもひ晴ぬなり。  
遊べあそべ、夜もすがら、可惜此夜空に爲な、花  
は散りゆく、春は暮れ行くく。

原作曲者 Brahms 曲〈Der Abend〉

新 版 圖

旗野十一郎作詞

(初段)

「モリソン」の。やまは。くもまに。たかしり、  
淡水 流 白 栲 曝  
たんすゐの。なはは。しろたく。さらせり。  
君 今 知 在 初 國  
ア、きみが。いま、しります。はつくに、はつく  
に。

田畑 肥 物 多 人

たはた、こえて。もの。さはに。ひと。とむ。

(中段)

此 新 縣

この、にひあがた、こそ。

雪 夜 戦 争 辛 艱

ア、ゆきのよの。たゝかひ。つらし。

吹 雪 日 城 攻

ア、ふぶくひの。しろせめ。ふぶくひの。しろぜ

め。つらし。

辛 艱 思 後 世 紀 念

ア、つらきも。おもへば。のちのよの。かたみな  
れ。

(結段)

「モリソン」の。やまやま。たんすゐの。かはや

時 得 形 勢

は。ときえたる。すがたぞ。

冬 伏 草 木 春 花 咲 今

ふゆふす。くさきも。はるには。はなさく。いま、

御 代

わがみよは。

花 盛

みよは。はなの。さかり。

みよはなのとが。

原作曲者 Fenssen 曲〈Neue Lieder〉

新 緑 の 賦

武島又次郎作詞

新緑。天地は 今こゝに、あらたなり。

きませり、きませり、葉守りの神

新緑。天地は 今こゝに あらたなり。



きませり、きませり、葉守りの神

新緑。天地は、今こゝに あらたなり。

迷多き 彌生のころ根 涼しき風にて 拂ひて

きよめむ。

けがれにほき 春の芥 きよき雨に 洗ひ去ら

む。

迷多き 彌生のころ根 涼しき風にて 拂ひて

きよめむ。

右の御手に橋 左りの御手には 紫陽花

舞ひつ 笑みつ 躍り来る 葉守りの神 尊や。

原作者 Mozart 曲 (Agnus dei)

人生

武島又次郎作詞

にほつる櫻は、これ紅顔なり、みどりの木々は、  
若き思ひに、似たりや、成功の秋穫、かしらの  
雪、秋と冬のさまなり、あゝ人生こそ、四季な  
れや、櫻はちれども、また實をむすぶ、しかり、  
しかり、雪ふりつもれど、千草下に萌ゆ、  
實をむすぶこと、業をばつみつ、雪間の千草、  
もゆる如くに、つとめて、高き身の名をば、残さ  
むには、おはれあはれ、命の盡くとも、たえず  
も、命ぞあるべきたえずも、うれしや、うれし  
や。

原作者 Schumann 曲 (Beim Abschied zu Singen)

神武東征

鳥居悦作詞

天晴よ、めでたや。天晴よ、めでたや。肇國中

津は、美地。

四周には、青山。美し。四周には、青山。美し。

六合の中心廣し、恢弘ましや、天業。

皇師を、率させ、中津、征ち給ふ。

天晴、皇師。起せよ、皇師。起せよ、皇師。

行けや、行けや、行けよや、行けよや。

立てや、立てや、兵士、兵士。

撃てや、撃てや、凶徒等、凶徒等。

撃てや、凶徒。立て立て、兵士。

國士の凶徒は、稜威に伏して、まつろひぬ。

めでた、めでた、めでたや、めでたや。

天業、建るや基。

天晴、めでた、めでたや、肇國。

天晴、めでた、めでたや、肇國。

原作曲者 Handel 曲 「The Messiah」より

〈Hallelujah〉

菅原道真

鳥居悦作詞

第一段

仰げや、仰げや。仰げ諸人。千歳の後にも、仰げ

諸人。

仰げや、諸へや。仰げや、稱へや。仰げ、諸人。

仰げや、諸へや。公の誠心。仰げや、諸へや。公

の勲功。

仰げや、稱へや。千歳の後にも、仰げ諸人。

第二段

春の臘夜や、月も薫れり。梅の匂には、空も霞め

り。

あはれ、あはれや。父の仰の、あるや直ちに、善

くも作れり。梅の唐詩。

春の始なり、今日はおも賭弓。弓矢携へ、集ふ弓場

殿。

あはれ、あはれや。人の勸に、固辭む由なく、善

くも射たり。榮の賭弓。

帷垂れつゝ書を讀む暇、弓の道さへ、何時か習ひ

けむ。

月の桂も、今は手折れり。

あはれ、あはれや。深き情の、母の教よ。

家の風こそ、世々 吹せめ。

第三段

あはれや、此公。あはれや、此公。御門の柱石。

あな……あはれやな。

あはれよ、此公。精忠なれや。あはれや、此公精

忠なれや。

鴻臚の應接。國司の祈雨。智仁の徳かや。

遣唐使節を、廢めしは、勇斷。

大和の御幸の、手向の紅葉。

御門の行幸の、諫の五位驚。

あはれや、尊し。幼主を補佐して、四海を撫育す。

嗚呼、あはれや。嗚呼、畏し嗚呼、畏し。

あはれや、畏し。幼主を補佐して、四海を撫育す。

御門の柱石。

石筑に在すも、心は都に……

去年今夜侍二清 涼一秋思詩篇獨斷 腸。

恩賜御衣猶在此。捧持毎日拜二餘香。  
是れ此詩をこそ見め。是れ此心は、君……  
是れ此公こそ精忠……

#### 第四段

天晴、仰げ、仰げ諸人。天晴、仰げ、仰げ、諸人。  
仰げ、仰げ、公の勳功。稱へ、謠へ、公の勳功。

原作曲者 Mendelssohn 曲〈Festgesang zur  
Gutenberg-Feier〉

#### 聖壽無窮

鳥居忱作詞

吾が君が代は、めでたしや。  
吾が君が代は、めでたしや。  
吾が君幾千歳。吾が君、幾千代。  
其の數、指しては、知らじな。  
其の數、鶴龜さへ、指して、其れと知らじな。  
吾が君が代、天晴、吾が君が御世。  
噫、噫、きはみなし。  
噫、噫、かぎりなし。  
噫、噫、噫、噫

原作曲者 Wagner 曲「Tannhäuser」より  
〈Marsch & Chor〉

#### 征途の夢

鳥居忱作詞

一、高梁に、風わたり、  
月は落ち、夜はふけぬ。  
おもしろや、冠守る、塹壕には、  
手剛なる、夜襲は、撃退。

イデ、背囊、イデ、枉に、  
暫時は、憩はむ。  
五月雨に、栗の花  
咲き初むる、背戸の口。

なつかしや、去年立ちし、吾が家。  
そこに立つ、人影、そも誰ぞ。  
オゝ母上。オゝ姉君。今のは、夢よな。  
原作曲者 Jark 曲〈Heimweh〉

#### 清流

武島又次郎作詞

一、花咲くあした、月澄むゆふべ。  
光を身に浴び、香にぞしむ。  
あゝ、塵の外、世を流るゝ汝、  
清きながれ。  
二、風吹くひるも、雪ふる夜半も、  
たゆまずうまず、流れゆく。  
あゝ人の道の法しめせる汝、  
きよきながれ。

原作曲者 Brahms 曲〈Greetings〉

#### 蘇武

鳥居忱作詞

射落す、雁がね、不思議や、齎す玉章  
寒しよ、朔風。  
人氣も、絶たる、窖の中、  
白雪、旗の毛、齧みしが。  
辛くも、臣節は、守れり、  
荒野に、羝羊、牧ひつゝ。

原作曲者 Mendelssohn 曲〈He that shall endure  
to the end〉

#### 對水感別

旗野十一郎作詞

#### 第一章

春の日は、おなじ。この川の、ながれ。  
岸づく、花を。水底にしつめ。  
文まなぶ、いとま。ともに見し、色も。  
わかれなむ、のちは。心逝く、みづぞ。

#### 第二章

秋の夜は、おなじ。この川の、ながれ。  
澄わたる、月を。漣に、ひたし。  
歌かたる、をりに。きみと見し、影も。  
わかれなむ、後は。こゝろゆく、水ぞ。

原作曲者 Cooper 曲〈Farewell, ye Streams〉

#### 高津宮

鳥居忱作詞

(低音獨唱)  
大殿破れ壞れて、雨は漏る。我が百姓は、榮え  
て富めり。國中に滿つ、炊煙。

#### (四音部合唱)

(低聲部合聲)

嗚呼、嗚呼、嗚呼、聖の御世。嗚呼

#### (四音部交互合唱)

我が王君は、科課役免すと、宣給ひき。ありがた  
や。ありがたや。大御心は、山のごと。大御心  
は、海のごと。かしこや。たふとや。

#### (四音部合唱)

大殿破れ壊れしな。楯をもて漏る雨を受け。漏らさぬ所にますと。

(四音部交互合唱)

大殿造り給ふ。皆行けや。皆ゆや。君の召しに。老を扶け、幼を携え、材を運び、簀を負ひ、日と夜と問はず、あらうひつくる。隆なりや。大殿なれり。盛なりや。大殿なれり。噫、噫、大殿なれり。

(四部合唱)

天晴、大御恵、山の如、海のことや

原作曲者 Mendelssohn 曲「Elias」より

橋の薫

鳥居悦作詞

第一段 櫻井の驛

漂ふ雲に、星たに見えず、空は暗し、皐月闇。篝火の、影更けて、あはれ、立花の濡る香も、小夜風に、薫りつつ。

楯の板敷き並へ、帷幄垂れ籠め、裏に、唯親子の二人。

君の御爲、汝をぞ遣す。此度我は義にぞ死なむ。

汝に傳ふ菊作り。

漏れや聞きけむ、猛き兵士。鎧の袖、嗚呼、しとどに。

山時鳥酌みやしつらむ、もののあはれを。

漏すや、雲間に一聲。

第二段 海陸寄手

淡路の瀬戸、繪島の沖、舳舻揃み、

敵の船、船舳輾りて、漕ぎ来る。

陸路にも、おびたゞしや、敵の旗の手。

第三段 菊水の譽

(其一)

天晴よ。菊水。天晴よ。菊水。

御宴の其折、白菊一英泛たる蓋。

御門の御手より、給ひしが源よ。

笠置の御門の假寝の御夢は、不思議の靈夢か。

天運開くる瑞相。

噫、天晴。噫天晴よ。天晴よ。

嗚呼、嗚呼、楠氏の忠義よ、楠氏の父子よ。

天晴よ、雄壯しさ。兵庫の湊に、強健の討死。

天晴よ、雄壯しさ。四條の堰に、強健の討死。

千早の孤城に義兵の旗擧。

武門の龜鑑。忠義の木鐸。

み空に流るゝ旗手は菊水。

古今の譽よ。

天晴、天晴、嗚呼、立花の薫、噫、ゆかしやな。

(其二)

金剛山下に繁れる楠、幾世か經にけむ。

敏達天皇の皇裔の、諸兄の王、楠氏の遠つ祖。

楠氏の父子の忠義に死せしも、故こそありしか。

政務に當るは、治國の四術か。管子の政策。

軍族に臨むは、兵家の四種か。孫子の軍略。

楠氏の父子よ。君子の高風、孝子の厚德。

(四重音)

諸兄の受けたる。天賜の御杯は、橋薫れり。

天晴よ、立花床しや、立花。

嗚呼、嗚呼、嗚呼、嗚呼。天晴よ立花、床しや、立花。

楠氏の姓や。

天晴、天晴、立花の薫、ゆかしやな。

楠氏の父子よ。健氣の討死、忠義の討死。

楠氏の忠義は萬古に互れり。

楠氏の忠義。楠氏の父子。

楠氏の父子の忠義よ。

嗚呼、嗚呼、嗚呼、

第四段 湊川合戦

(其一) 和田岬遠矢

和田の岬や乗出す武者。天晴好しや。武者振好しや。

遙の沖打ち見遣りて、上差の流鏑矢抜きて、打ち番へ、

矢頃計り、波打際に馬を立てり。

魚を掴み飛び立つ鵜、船の上に射てこそ落せ。

船ばたを踏みつゝ、鞍がさきに立ちつゝ、譽むる聲おびたゞし。

敵味方の目の前に、譽なり晴の業。

(其二) 賊軍上陸

敵の小舟寄するは、拔懸にや。

敵は徒立、味方は騎馬武者。

弓手に馬手に中にぞ、取り籠め、討ちも果さむ。

續く敵もあらじな。思の儘、皆こそ討取りたれ。

敵には、好き下場か、和田の岬。  
敵の船手あげたてじよ。かしこに追ひ行け。  
諸手の船漕ぎ寄せつゝ、磯に乘馬追ひ下し。  
和田の岬に打ちあがるよ。

(其三) 陸上闘諍

前後に敵は引き受たり。  
覚悟召せよ。今は遁れぬ處。  
前の敵一散し後の敵一捲り、いざいざゝゝゝ。  
東より西へ、南より北へ、割りて入りて、組みて落つ。  
今は残り少な。  
七度分れ、七度合ふか、同胞。

(其四) 楠公最後

我の力、今はや盡きたり。  
望は絶えぬ我等は。  
京を立ちてより、世の中は、是れまてとこそは、兼ねても思ひしか。

死ねや死なむ。いざやいざや共に。  
心静に十念唱へよ。

いかにぞや望は。いかにぞ臨終の望。  
望も今は世にはなし。七度此世に生れきて、討ちこそ果さめ、此の朝敵。  
静かに共に死せり、あはれ同胞よ。

(其五) 新田足利決戦

人馬の音に、天地轟く。  
阿修羅の闘諍、よもや是れには過ぎじ。  
親子離れ、主従別れ、恥知る武士、命を捨て戦ふ。  
或は討ち違へ、或は刺し違へ、討ちつ、討たれつ、討死す。

無念よ軍は負けか。  
天下も今は、賊手に落ちむ。無念よ。

第五段 持佛堂

(高音獨唱)  
燈火幽か、離の佛間。

(次中音獨唱)

人影さすは、是は其も誰ぞや。  
形見の刃にあはや危く生害。死ねとは、父の訓か。  
天下の安危汝が身にかゝる。汝が身は大事……。  
難に備へよ。

第六段 少時遊戯

おゝ、それ朝敵、撃ち取らむ。己れ尊氏よ。己れ朝敵よ。  
いでや打も果さむ。恐れは深し。君父の讎敵よな。天晴、健氣。はかなき遊びも斯くとぞ。

第七段 四條啜

賊軍四集、襲ひ来る。撃てど去らず。今朝より幾度の戦。  
我が將士、馬は弊れ、矢種盡きぬ。みかたは、残りも少し。

いざ来よ、家子郎黨、最後の決戦。  
臣子の分、是れまでぞよ。今こそ、死なめや。討つこと、かなはじ、敵の首は。いで授けむ吾が首。

同胞一つに討死。  
難に徇へ、死にしか。あゝ健氣。  
君父の讎は、討たでも死せしよ。遺恨はふかし。噫同胞。

原作曲者 Cherubini 曲 (Requiem)

玉 匣

鳥居忱作詞

一、珊瑚の臺、瑠璃の彩々。玉液を飲み、紫露を喰ふ。  
なべて此の世は、皆快樂、復もやこなむ、龍宮城。  
二、家園の跡は、海となり。物みな換り、星も移る。  
開けてくやしや玉の匣。幾百歳の、榮華のゆめ。

原作曲者 J.S. Bach 曲 Choral Commit Thy ways to Jesus—オリジナルタイトル (Befehl du deine Wege) (If I shall ever forsake Thee) [二種類のコーラルに歌詞が当てられている]

常 盤

武島又次郎作詞

ふゞきする 比叡おろし。  
笠やぶれ 身は氷る  
乳さぐる みどり子も 呱呱さけふ  
これぞ後年 三軍叱咤の聲。  
心急けど 氣を下折れ。とぼくと たどりゆく  
うしろかげ うづむ雪 千重。あゝ。  
原作曲者 Arcadelt 曲 (Ave Maria)

常夏姫

武島又次郎作詞

その一

やよ 仰げ、高貴なる みすがたを、尊や たふと  
やよ 仰げ、あてなる みすがたを、たふとや  
たふと。  
杜鵑花、ばら、たちばな、天土産と 降しつゝ  
渡ります。  
やよ 仰げ、あてなる みすがたを、たふとや  
たふと。

その二

あゝ げにも はかなき 春の夢、はや 覺ませ  
とか。  
あゝ、げにも はかなき 春の夢、はや さませ  
とか。  
清き月、涼風、諸御手に さづげつゝ、くだりま  
す。

原作曲者 Handel 曲《Lasst mir die Klage》  
やよ 仰げ、たふとき 御姿 あふげや あふげ

友の交

由比糸子作詞

空晴るゝ。冬のあした。ともに雪をかきあつめ。  
風そよぐ。夏の夕暮。ともに螢。とりあつめ。  
すみ渡る。秋の夜は。影をならべ。月をめ。  
霞こむる。春の日は。袖をつらね。花を見る。  
憂きうれしき。わけわかつ。  
へたてぞなき。友のまじはりや

原作曲者 Krenser 曲《Wenn zweie sich Gut

燕

鳥居忱作詞

霞める空に 友よびかはし 翅もろく なくつ  
ばくらめ  
なれにし去年の 軒端やかはる 古巢尋ねて こ  
かしこ  
とびかふ あはれその つばくら  
誰が懸けにける 印の絲で 思ひのいろもさなが  
らなるを  
結びし人は ゆくへもしらず をちかへりつゝ  
わびしらになくなり あはれその つばくら  
原作曲者 Schumann 曲《Wenn ich ein Vöglein  
war》

廿一回猛士

鳥居忱作詞

(低音獨唱)  
尊攘の大義は、今だに成らぬか。  
蹈海の奇畫は、曩にぞ敗れぬ。  
此の身は蹉跌よ。國歩は艱難、  
寒月差入る獄屋の裏、憂に沈みぬ、  
成敗は問はじな。天こそは知らるめ、噫我が眞  
心。  
(中音部)  
天下の形成、歳に月に逼りぬ。  
(四部合唱)  
如何に、いかに、今の國是。異國の黒船は、邊海

に出没す。

幕府は廟算、未だ立たず。  
尊王よ佐幕よ。開港よ鎖國よ。  
草莽の志士の横議。いかにいかにせむ國是。

(低音獨唱)

憂國の丈夫嗚呼慷慨。

(四部合唱)

今日の形勢、神州の安危、如何にいかに、先途  
は、如何に成り行く。  
天晴丈夫、其身を捨て、大儀に殉へり。天晴や、  
大義を唱へ、  
君に國に、其身は捧げり、  
天晴、天晴、かなし。一箇の丈夫は斃る、江戸の  
獄屋に。  
斃るゝまで、盡す、大義の魁。  
原作曲者 Mendelssohn 曲「Paulus」より

羽衣

鳥居忱作詞

春の曙、波より白らむ、三保の松原。  
富士の高嶺、霞みて映る、海の景色。  
空より花は降り来るは。  
「音楽聞え、  
靈香薫す。不思議よ。」  
濱の松枝に、妙なる羽衣は、懸れり。  
白龍取りて、去らむとす。  
「なふ、其の衣は、此方のよ。」  
露に憫む花の姿。  
羽衣なくば、

天に上る、因縁もあらじ。

あさましや。

羽衣着くるや、霓裳羽衣奏つ。

翳す衣の眞袖。

霞にまぎれ、姿は失せつ。

原作曲者 Hauptmann 曲〈Lerchenbaum〉

### 早起

旗野十一郎作詞

世に、身に、たのしく、

また、心地よく、朝日、さす窓に、

書、うちひらき、わがみち、すゝみて、

日をおくるべきは、

はや、おき、なれや

原作曲者 Decius 曲〈Lobgesang〉

### 春の夕景

旗野十一郎作詞

アー、アー、ゆふつげ、どり。からすの、むれの。

(かず)、かずよむ、ころ。(ころに。)

(みつ)、よついつ、むつ。(な。)(複唱)

花を、漏れくる。遠寺の、かねの音。時、知り、

がほなる、(複)

アー、夕告鳥。なにをか、いそぐ。春の、空に。

アー、アー、遠寺の、鐘のね。(複)などてか、

ひゞく。静けき、ころに。

さるは、なにぞや。然るは、なにぞや。想へば、

(複)時かも。

アー、ゆふつげ鳥。からすの、群の。飛び、いく

さま。(複)

花を、もれ来る。遠寺の鐘の音。心に、(ひん)、

ひゞくも。

アー、アー、見るも、聴くも。(複)身の幸、そへ

ば、みな嬉しき。(複)神の、たまもの。(複)

さらば、あはれは。時にも、あらじか。

鳥の飛ぶさへ。かねの、こゑさへ。心の(あや)

あやなり。

わきて、たのしき。(複)春の、ゆふぐれ。

原作曲者 Haydn 曲〈Abendlied zu Gott〉

光は東方より

安藤勝一郎作詞

み神の勅命ぞ。

東亜の盟主と

たてし旭旗、

『光』東 光

照らす光

仰ぐや九億

亞細亞の靈。

原作曲者 Praetorius 曲〈Es ist ein Rös ent-

sprungen〉

聖の御世

鳥居忱作詞

〔歌詞は明治四十年十二月十五日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原作曲者 Gluck 曲〈Trost im Scheiden〉

### 雲雀

小野竹三作詞

明くるみ空に ひゞく樂の音

噫、誰のしらべ 噫、姿いづこ、

あれく彼處に あゝ飛ぶその影、

噫、告げよ語れ 噫、天の不思議

雲のかげ橋 汝ハ攀づるか、

噫、崇きころろ 噫、かろき翼、

あれくかしこに あゝ聴けそのこゑ、

噫、うれし樂し 噫、永久の希望。

原曲 フレミツシユ古歌

### 簸之川上

鳥居忱作詞

噫、泣く聲、いづこ、いづこ。

あゝそれ、あゝその聲辿りゆかむ。

妙なる乙女、翁媼、手に手を取り、さめざめ泣く。

あゝそも誰ぞ、何ゆゑ泣く。あゝ、何とて泣く。

そもや我れは、國つ神よ、かつて八人、乙女あり

き。

取喰はれしよ、八岐の大蛇。いでや撃たむ。

いでいで撃たむ。いでいで撃たむ。八岐の大蛇。

嗚呼嗚呼、畏や。嗚呼嗚呼、畏や。雄々しき神、

威徳畏や。

原作曲者 Tchaikovsky 曲〈Hymn to the Trinity〉



領巾磨嶺

鳥居忱作詞

一、松浦の濱崎、磯の高嶺。

離別の名残は、此處に惜まむ。

吾背思ふ事、猶もあるに。

名残の惜さよ。船は出でぬ。

二、夕汐満るや。追手吹きぬ。

薄情も追情の、吹くかつれなき。

などや追風吹く。などで吹くよ。

眞帆には帆揚げて、船は行くよ。

三、松浦の濱崎、磯の高嶺。

我領巾磨りてや、船を招かむ。

吾背名残惜しやよな吾背。

領巾磨り翳して、船をまねく。

四、夕霧籠るや、八重の汐路。

暮行く帆影は、浪に消えつゝ。

悲し、悲しやな、あはれ、佗し。

想思は載せつゝ、船は行くか。

原作曲者 Silcher 曲〈Lorely〉

富士艦

旗野十一郎作詞

祝へや、歌へや、いはへや、うたへや。美艦來着

れり。いはへや美艦來着れり。祝へ、ふじのみ名

よび。祝へ、歌へ、いはへ、うたへ、ふねのほま

れ。いはくふじのみ名呼び。いはへ、うたへ、祝

へ、歌へ、祝へ、歌へや、うたへや、艦の名譽。

祝へ、世界廣けど。國のかぎり、山のかぎり、ま

たあらず。

(男) アゝ、たぐひなきやま。(女) 萬歲、萬歲  
(女) アゝ、ならびなきやま。(男) 萬歲、萬歲  
アゝ、たぐひなきふね、アゝならびなきふね。

(男) 萬歲、(女) 萬歲、(男) 萬歲、(女) 萬歲、  
(女) 萬歲、(男) 萬歲、めでた、めでたや。

あはれ、み艦の名譽は。あはれ。皇國のほまれ。

あはれはれ、其名。

アゝ、たぐひなきやま。アゝ、ならひなき艦。萬

歲、めでた、めでたや。めでた、めでたや。萬歲

めでた、めでたや。めでた、めでた、めでた、め

でた、めでたの名や。めでた、めでた、めでた、

めでたのふね。

嗚呼、ふなぢは、颶風も、浪も、さはらず。祝

へ、歌へ、艦の幸福は。國の幸福ぞ。

原作曲者 Beethoven 曲「Christus am Ölberg」

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

より〈Hallelujah〉

埔頭別離

旗野十一郎作詞

〔歌詞は明治四十年十二月十四日、十五日の「音樂演奏  
曲目梗概」を参照〕

原曲 Skandinavisches Volkslied (Abschied)

ふるき都

武島羽衣作詞

第一章

荒野の はな むかしを忍ぐ

公子の こま 佳人のそで

荒野の はな

今はや 影も みへすなれど

香のみは かわらず  
荒野の はな

第二章

荒野の 月 むかしを思へ

絃歌の聲 金壺の酒

荒野の 月

今はや 夢の あとゝ なれど

光りは かはらず

荒野の 月

原作曲者 Schumann 曲〈John Anderson〉

鞭聲 肅々

鳥居忱作詞

月毛の馬に、一鞭あてゝ、躍り入る。

筑摩の川や、白波蹴立つ、一箇の勇將。

勇ましや、白き絹の鉢巻。鎧上には胴着。其出立

勇ましや。

目指す當の敵の大將、川の最中、遁れ行くは。

遺恨は深し、遺恨は知れと、三太刀まで疊み懸け

て斬るや。

軍配團扇に危く、辛く受け留め受け流す。

さてもくやし、さてもくやし、逸したりや。逸し

たりや。

甲越二國の紛糾は、愈解けず。

古今の大戦、拾有餘年、勝敗決せず。

故國を追はれ、他郷にさまよふ。

窮鳥、懷に入る、獵夫も之を助くとか。

英雄の本領よ。

智仁勇三德兼備、六韜三略、はた孫吳の籌策、古



今獨歩の勇將<sup>こんどっぽのゆうしょう</sup>

さてもくやしやな、逸<sup>い</sup>したりしな。唯一<sup>ただひと</sup>太刀に撃<sup>うち</sup>つべかりしを。

さても流星<sup>りゅうせい</sup>の光底<sup>ひかりて</sup>に長蛇<sup>ちやうだ</sup>を逸<sup>い</sup>せりや

原作曲者 Mendelssohn 曲「Elias」より「Yet  
deh the Lord see it not」

## 奉迎の歌

黒川眞頼作詞

八洲<sup>やしまくに</sup>國に 照<sup>て</sup>し坐<sup>ます</sup> 我大君<sup>わがおほぎみ</sup>の 行幸<sup>いでまし</sup> 嗚呼<sup>あな</sup>尊<sup>たか</sup>と  
嗚呼<sup>あな</sup> 寵愛<sup>めであ</sup> 我君<sup>わがきみ</sup>が代<sup>よ</sup>は 萬歲<sup>ばんざい</sup>

原作曲者 Lassus 編曲 Kremsier 曲「Old Netherlands Festival Song」

## 火砲の雷

里見義作詞

一 火砲の雷なり、矢玉の雨ふる、筑紫の海邊を、たれかはまもれぬ。おそるな國民おそるな國民、日本男兒まもれり、日本男兒まもれり。

二 我兵十萬、忠勇無比なり、心を一つに、せとぐちまもれり。おそるな國民、おそるな國民、日本男兒まもれり、日本男兒まもれり。

三 矢玉はつくとも、刀はをるとも、生血のあるまは、敵をばとほさじ。おそるな國民、おそるな國民、日本男兒生まれり、日本男兒生まれり。

四 雲霧をさまり、日の旗かゞやく、かためよまもれよ、ながとのせとぐち。おそるな國民、

おそるな國民、日本男兒守れり、日本男兒まもれり。

原作曲者 Wilhelm 曲「ドイツ準国歌」(Die Wacht am Rhein)

## 暮 秋

武島又次郎作詞

山<sup>やま</sup>べににほふさくら<sup>はな</sup>の花。をり翳<sup>かげ</sup>しゝも昨日<sup>きのう</sup>の夢。川<sup>かは</sup>べにきよき柳<sup>やなぎ</sup>のかげ。すゞみとりしも昨日<sup>きのう</sup>の夢。山風<sup>やまかぜ</sup>早くしぐれきつ。木の葉<sup>このは</sup>ふきまき梢<sup>こすえ</sup>もあらはよ。ながれし水<sup>みづ</sup>も枯<sup>か</sup>れはてて。雲間<sup>くもま</sup>にほそき月<sup>つき</sup>もすこし。うれひのさ霧<sup>ぎり</sup>ころをこめ。何<sup>なに</sup>となけれど歎<sup>なげ</sup>かれつゝ。昨日<sup>きのう</sup>と同じ心<sup>こころ</sup>ながら。かくもかはるは何<sup>なに</sup>が故<sup>ゆえ</sup>ぞ。されどうれしや、かげは消<sup>き</sup>えず。「希望<sup>のぞみ</sup>」の月<sup>つき</sup>こそ胸<sup>むね</sup>のうちに。あはれ

原作曲者 Schumann 曲「Schöne Blümlein」

## 暮 秋 の 杜

石倉小三郎作詞

〔歌詞は明治三十九年十一月十日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原曲 Aldeutsche Volksweise (Im Herbst)

## 暮 春

武島又次郎作詞

一 愁紅<sup>しゅうこう</sup>駭<sup>おどろ</sup>緑<sup>りよく</sup>、細雨<sup>さいう</sup>くらし、そことなく、鐘<sup>かね</sup>も鳴<sup>な</sup>りて。あゝ思<sup>おも</sup>へば はかなや 時<sup>とき</sup>めきし 春<sup>はる</sup>の果<sup>はて</sup>

二 風<sup>かぜ</sup>さむき 窓<sup>まど</sup>のもと、文机<sup>ぶんぎ</sup>に 物<sup>もの</sup>ぞおもふ。文<sup>ふみ</sup>のうへと見<sup>み</sup>れば 半落花<sup>ななかばらくわ</sup> なかば涙<sup>なみだ</sup>。

原作曲者 Bencken 曲「Den Entschlafenen」

## 墓 前 の 母

安藤勝一郎作詞

こころの關路<sup>やみぢ</sup>を、子<sup>こ</sup>ゆゑ 覺<sup>とく</sup>め來<sup>く</sup>れば、泉<sup>いづみ</sup>頭<sup>かみ</sup>たゞ啼<sup>な</sup>く。

原作曲者 Nanini 曲「Stabat mater dolorosa」

## 窓 の 秋 風

中村秋香作詞

一、書讀<sup>よみよみ</sup>む窓<sup>まど</sup>の、いさゝむら竹<sup>たけ</sup>に、そよと音信<sup>おとづ</sup>れて、

今年<sup>ことし</sup>もいつか、立ちぬる秋<sup>あき</sup>の風<sup>かぜ</sup>。あはれ はかなく過<sup>す</sup>ぎ行<sup>ゆ</sup>く、月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>や。かひなく更<sup>ふ</sup>け行<sup>ゆ</sup>く、吾<sup>わが</sup>世<sup>よ</sup>や。

原作曲者 Fuchs 曲「Die Gute Nacht」

松浦佐月姫

武島羽衣作詞

いざいざ返せよ、いざいざしよ、沖なる其の船。

あはれや、我をば、見捨てて行くか。  
我夫をかへさむ、風吹きおこせ、あはれと思はで、みそらの神よ。

詮なき玉の緒、絶えなば絶えよ。  
水屑となるとも、思はやまじ、岩ほととなるとも、願はとげむ。

いざいざ返せよ、いざいざしよ、沖なる其の船。  
あはれや、我をば、見捨てて行くか。

原作曲者 Weinurm 曲「Toschanische Lieder Nr. 6」

稜威耀乎

鳥居忱作詞

噫、尊、噫、尊。  
尊、畏、稜威。  
噫、千早振、神代従、ためしは聞かず。玄海の大捷。  
稜威、尊、稜威、畏や。

原作曲者 Palestina 曲「Adoramus te, Christie」

みそぎ

石倉小三郎作詞

あ、あ、八重雲を、いつの千別きに  
ちわきて、神よ、聞こし召さへ。  
天の下、四方の國の、罪とふつみ、

のこりなく、氣吹き放ち、放たへと。  
あ、あ、みそぎして、ひもまつるを、  
高山わけて、きこしめさへ。

原作曲者 Bruch 曲「Gebek」

百舌鳥の歌

旗野十一郎作詞

枯芝に。うち倒し。おくれ花も、あみて。見わたしの。野も里も。まれの小春、日和。まことの秋の、さなか。

はたすゞぎ。ほにいで。おのが、まのの。さまたまを。もす鳥の、百轉り。なにか語る。

かりんも。紅葉観て。けふは獵箭、とらず。さとの子も。輩狩りて。今日は鳥網はらず。

瓢提げて、遊ぶ。  
草ぐきも。忘れつ。彼呼び。汝呼び。

野らむきて。野らの事。里回むきて。さとの傍説。

早稲中稻。稲梁にかけ、すめ躍る、ころよ。山柿も。色すきて。からす騒ぐころよ。三冬ころも

る、設けに。  
をかし。をかし。鵲どりの。さへずり。

原作曲者 Mendelssohn 曲「Song of the Sky-lark」

愉快

旗野十一郎作詞

仰ぐ虚空は、愉快、々々。山の方も、愉快々々。  
河の方も、愉快、々々。

残る星、閃然、々々。七つ六つ、五つ四つ、見る間に、影消えぬ。

高峯蒼み、雲赤み、ほがら、ほがら、明くるさまは、活動繪畫。その木立、かしこの里々、まだ

夜は常暗、かげろ、かげろ、雞の聲。アレ、アレ、アレ、愉快。

天の戸開けて、展動々々、指昇り、耀、耀、光る朝日子。耀、耀、光る朝日子。草に忍ぶ露もおきて、枝に眠る百千鳥も、歌ひ奏つ。

愉快々々、野邊の路、歩行足の冷つき。

愉快々々、田面吹く、風の色、袖に浴びて、青く清く、そよ、そよ、そよ、そよ。

愉快々々、水の面に、走る浪も、黄金砕き、さらさら、さら、さら、およそあると、あるものは、

自然の狀態うつし、各自ず成しの、まんなして、彼れも愉快、是れも愉快、かれこれ思つは。

造物者のたまものよ。  
愉快々々、愉快々々、愉快々々。愉快

なるは此世界の明方。  
原作曲者 Haydn 曲「Die Schöpfung」より

近ける友

乙骨三郎作詞

〔歌詞は明治四十四年五月二十七日の「音楽演奏曲目梗概」を参照〕

原作曲者 Bencken 曲「Den Entschlafenen」

夢

佐藤誠實作詞

種れる思、五百重の山。  
山川たどりて、小夜中に君。  
學は如何にや。恙はなきか。  
願 早や遂て、見よや我子。  
語らふ間無く、いづちか坐す。  
恨めしや、夢か。墓無の夢。

原作曲者 Schumann 曲〈Der Traum〉

幼 兒

旗野十一郎作詞

ア可憐 幼兒ほど 現身の 世の中に たのしき  
は またとなし 過日の片言も 今日にはやもの  
語る、ああ此處まで來よ なにやらむ 風車め  
くる日の かさなれば 竹馬の 乗りぶりも い  
まや はや ものなれつや いつかをしへぬまに  
君が代のほぎ歌も ふしつけて うたふなり  
物學ぶ 年齢よ はやも成れ をさなごよ、

原曲 ロシヤ民謡〈The Flax〉

我 國 民

大和田建樹作詞

第一章

久方のそら高く、そり立つ、芙蓉の高嶺。あれこ  
そは、國民の、抜け出し、其の姿、潔き、ゆき  
の色、麗き、朝日の光、皇國を護の武士よ。なら  
へいざ、あの山に。

第二章

三吉野の、春深く、咲きつづく、千本の櫻。それ  
こそは、國民の、香ばしき、名の鑑。空を負ふ、  
朝の色、世に満る、夕の匂。世界に知られむ大丈  
夫よ。かざせいざ、その花を。

第三章

つはものゝ、腰に佩く、三尺の秋水なにぞ。これ  
こそは、國民の、世を照す、身の寶。夏さむき、  
霜の色、風を斬る、氷の光。魂きたへむ、同胞  
よ。磨けいざ、其の太刀を。

原作曲者 Mozart 曲〈Vaterlandruf〉

我 武 惟 揚

鳥居忱作詞

嗚呼、皇軍、連戰連捷。嗚呼、振古の大捷。  
噫、我が武は惟れ揚るよ。  
大元帥陛下、稜威の光輝は、赫々皓々、八紘照ら  
す。  
貔貅百萬、嗚呼、壯觀。嗚呼、砲車は煌々。嗚呼、  
鉄騎は彭々。  
噫、壯絶。噫、快絶。皇軍全捷。敵軍殲滅。  
嗚呼、懸が武は惟れ揚る。

原作曲者 Wagner 曲〈Kaiser-Marsch〉

別 歌

旗野十一郎作詞

眞廣し、ひろし。嗚呼此の、殿よ。  
榮えに、さかゆ。嗚呼我が、道よ。  
卒業人と、洋行人と、學問の人と。  
會合る今日ぞ。

今日にも、今の、時間こそ、これ。  
無量の、感情。たがひに、湧く。  
世の爲、思へば、別の、憂に、嬉しき、籠る。  
いかにや、君。  
教育の、山に、へ登る、もの。  
世界の、海を、い渡る、もの。  
なほ斯の道に、勇進るものも、諸聲高し。

原作曲者 Krenser 曲〈Lebewohl〉